信州のオリンピアン

聖火の記憶

果敢に攻め　切符逃した96年が糧に

陸上男子20キロ競歩　柳沢哲（やなぎさわ・さとし）さん
中野市出身、東京都町田市
2000年シドニー五輪出場

世界トップクラスの実力をつけた日本の競歩。男子20キロで2000年シドニー五輪に出場した柳沢哲は、翌01年の世界選手権（カナダ・エドモントン）で同種目の日本人初入賞（7位）を果たし、日本が世界レベルに近づく弾みをつけた。現在は競歩のテレビ解説者としても活躍している。

競技人生で最も印象に残っているシーンに挙げたのが1996年アトランタ五輪の最終選考レースだ。同年1月の日本選手権で3連覇を達成。4月の全日本輪島大会が最終選考会だった。

「周囲には『僕が（五輪に）行かなければ誰が行くんですか』と言っていた。自分を奮起させるためでもあり、口に出さないと出られないと思っていたので」

意気込んで臨んだレースは自身が持つ日本記録を上回るペースで進んだ。残り4キロで中国の招待選手が飛び出す。その時点で柳沢には歩型の警告が2回（当時は3回で失格）出ていた。無理せず、代表を争っていた池島大介との勝負に徹すれば良かったが、果敢に中国選手を追った。

「日本の試合で海外の選手に負けることは許されないと、鼻息が荒くなってしまった」。その気持ちが裏目に出て、残り2キロで失格を宣告された。池島が日本新記録でゴール。代表枠1を争う柳沢の立場は暗転した。

悔しさを糧にした経験を語る柳沢哲さん

諦め切れず、すぐに海外遠征を決めた。日本陸連からは「もう選考会が終わっているから、仮に海外で日本記録を出して勝ったとしても代表には選ばない」と言われた。それでも意地があった。「池島選手を日本記録保持者のまま五輪に行かせたくない」

欧州の3大会に出場。2戦目のドイツの大会では日本記録を上回ってゴールしたが、レース後に失格を言い渡された。目的を果たせず、心身とも擦り切れて帰国した。

それ以降は「意気消沈した3年間が続いた」。日本選手権の連覇は途切れ、自己記録も更新できない状態。フォームへの不安を拭えず、レース終盤の勝負どころで警告を受けると、ペースを落とすしかなかった。

再び巡ってきた五輪イヤー。所属先からは、代表を逃したら支援を打ち切ると伝えられた。「後がなくなったことで、逆に開き直れた」。シドニー五輪代表選考で重要になった日本選手権で4年ぶり4度目の優勝を1時間19分29秒の日本新記録で飾った。

29歳で迎えたシドニー五輪。陸上競技で最初の決勝種目となった男子20キロ競歩で、柳沢は攻めのレースに徹した。先頭集団に入り、中間点の通過タイムは当時の10キロの日本記録を上回るハイペースだった。

「先頭に付かなければ何の可能性もない。メダルか（最下位の）50番ぐらいの気持ち」。15キロ手前で先頭集団から脱落し、22位でゴールしたが、「自分のやりたいレースはできた」と悔いはなかった。

「もう1周（2キロ）粘れたら入賞できる、さらにもう1周粘れたらメダルに届く感覚をつかめた」。それを翌年の世界選手権で証明。「五輪の経験があったから、世界選手権の入賞につながった」と話す。

だからこそ悔やまれたのがアトランタ五輪を経験できなかったこと。レース展開に加え、暑い夏場の調整方法や慌ただしく続いた五輪壮行会への対応…。アトランタ五輪を経験していれば、シドニー五輪ではもっと違う結果を出せたという思いがある。

「アトランタ五輪代表に選ばれなかったことは今も根に持っているんでしょうね。でも失格したのは自分。ただ言えるのは、あの失敗で選手としての奥行きは出た」

04年にアテネ五輪代表を逃して引退。05年から10年まで東京大学生涯スポーツ健康科学研究センターに勤務し、高齢者の体力指導や知的障害児童のトレーニング指導に従事した。

その傍ら、母校の山梨学院大でコーチを務め、11年からオーストラリアで1年間のコーチ留学を経験。中野実高、山梨学院大の後輩に当たる藤沢勇（中野市出身）の2大会連続五輪出場も支えた。

現在は会社勤めの傍ら、トップ選手から高齢者まで幅広い年齢層を対象にウオーキング指導を行う。07年からは世界選手権や五輪でテレビ解説を務める。心がけるのは素人目線の解説。「競歩に興味を持ってくれる人や面白いなと思ってくれる人に、どれだけ心に刺さる言葉やトピックスを話せるか」

（敬称略）

（編集委員・小平匡容）

〈随時掲載します〉

柳沢哲の略年譜

1971年	1月19日生まれ。中野市出身
86年	中野実高に入学、1年目の秋に競歩を始める
93年	山梨学院大卒業、香川県スポーツ振興財団所属
94年	綜合警備保障入社
96年	日本選手権で3連覇
2000年	日本選手権で4年ぶり優勝
	シドニー五輪で22位
01年	世界選手権で7位入賞
02年	アジア大会で3位
04年	現役引退
11年	1年間のコーチ留学で豪州へ
16年	指導する藤沢勇が五輪2大会連続出場

シドニー五輪の男子20キロ競歩で力を振り絞る柳沢哲＝2000年9月22日

杭州アジア大会

エペ加納V　フェンシング男子　日本勢対決 制す

【杭州共同】杭州アジア大会第4日の26日、競泳男子400メートル個人メドレー決勝で本多灯（イトマン東京）が4分11秒40で競泳日本勢に金メダル第1号をもたらし、前回覇者の瀬戸大也（CHARIS&Co.）は1秒48差の2位で続いた。

日本選手同士のフェンシング男子エペ個人決勝は、東京五輪団体金メダリストの加納虹輝（JAL）が古俣聖（本間組）を15―7で下した。セーリング混合470級は岡田奎樹（トヨタ自動車東日本）吉岡美帆（ベネッセ）組が世界選手権を制した実力を発揮して優勝を決めた。自転車男子チームスプリントの日本（長迫、太田、小原）も決勝で中国を破って頂点に立った。

卓球女子団体決勝の日本（早田、平野、張本美）は中国に0―3で屈して5連覇を許した。ラグビー7人制女子の日本も決勝で中国に21―22で惜敗した。体操男子個人総合の北園丈琉（徳洲会）が2位に入った。

柔道女子78キロ級の高山莉加（三井住友海上）は決勝で敗れた。男子100キロ級の東京五輪王者、ウルフ・アロン（パーク24）は5位だった。

本多、意地見せ金　400競泳男子個メ

世界水泳の雪辱　競泳ニッポン金1号

男子400メートル個人メドレーで金メダルを獲得した本多灯＝杭州（共同）

競泳の男子主将を務める今大会は予選から納得の泳ぎで、同じ轍（てつ）は踏まなかった。次の個人種目は競泳最終日の29日に行われる200メートルバタフライだ。

競泳、日中で序盤戦明暗

中国が金量産・日本は2日間ゼロ

前回2018年大会の競泳で金メダル19個ずつを獲得した中国と日本は、今大会の序盤2日間で明暗がくっきり分かれた。地元の大声援を後押しに中国が14種目で11の金メダルを積み上げたのに対し、日本は表彰台の真ん中に立てなかった。

競技初日の24日、中国は実施7種目を総なめにした。最初の種目、女子200メートルバタフライで「大会最優秀選手（MVP）を狙う」と公言している東京五輪女王の張雨霏が期待通りに優勝し、勢いをつけた。男子200メートル個人メドレーの汪順が7月の世界選手権（福岡市）で1位相当のタイムをマークし、男子100メートル自由形の潘展樂は世界記録に0秒11差に迫るなど、内容も申し分ない。

世界選手権で中国が金メダル5個を奪ったのに対し、日本はゼロ。今大会も厳しい戦いは予想されていた。さらに直前の北海道合宿でインフルエンザが流行するなど、体調に不安を抱える選手が少なくないことも苦戦に拍車をかけている。

1954年大会から前回までの17大会で日本が優勝16度、2位1度と強さを誇っていた25日の男子800メートルリレーは韓国、中国の後塵（こうじん）を拝し3位。男子背泳ぎの33歳、入江陵介（イトマン東進）は「中国に圧倒的な力を見せられ、みんな悔しい思いを持っている」と語気を強めた。

柔道男子、過去最低の金1

日本男子の金メダルは66キロ級の田中龍馬（筑波大）の1個にとどまった。1986年ソウル大会で柔道が正式競技となって以降、過去最低。現行の7階級制で実施された大会では18年ジャカルタ大会の2個、無差別級を含め8階級制だった時代でも86年ソウル大会と06年ドーハ大会の2個が最も少なかった。

セパタクロー男子レグ1次リーグのタイ戦でプレーする小林裕和（リブゲート・須坂市出身）＝金華（大会組織委提供・共同）

本多、意地見せ金

競泳男子個メ

2カ月前の悪夢を振り払った。競泳男子の本多灯は、7月の世界選手権（福岡市）で予選敗退を喫した400メートル個人メドレーで頂点に。競泳ニッポンにとって今大会初の金メダルに「ほっとしている。今できる最高の400メートル個人メドレーができた」と喜んだ。

得意のバタフライで先行。続く背泳ぎと平泳ぎは課題とする泳法で、世界選手権3位の瀬戸に逆転を許したが、想定はしていたけに「焦らず、落ち着いていけた」という。最後の自由形で前を泳ぐ先輩を抜き去った。

400メートル個人メドレーは昨年の世界選手権で7位だった。今年の福岡大会は不調で、精神面の不安が生じた。これが優勝も期待された200メートルバタフライに影響して3位という不本意な結果に終わった。

セパタクロー

▽男子レグ団体1次リーグA組
タイ　3―0　日本
2勝　2敗
▽同A組順位
1勝1敗　③日本
2敗＝落選
▽女子レグ団体1次リーグA組
インドネシア　3―0　日本
2勝　2敗
▽同A組順位
1勝1敗　③日本
2敗＝落選
▽男子レグ団体1次リーグA組
（筑波大）　2―1　日本
（アラブ首長国連邦）
▽同3位決定戦
横車　28秒　太田（旭化成）
ユスポフ（ウズベキスタン）
▽女子78キロ級準々決勝
上四方固め4分0秒　ラヒモフ（タジキスタン）
▽同準々決勝
外巻き込み56秒　ゴンチクスレン（モンゴル）
▽同3位決定戦
優勢　ウルフ・アロン（パーク24）
▽男子100キロ超級1回戦
合わせ技52秒　ワルダナ（インドネシア）
▽同準々決勝
大外落とし5分27秒（延長）　太田（旭化成）
▽同敗者復活戦
片羽絞め38秒　李瑞軒（中国）
▽同準決勝
内股　マヤフ（トルクメニスタン）
▽同敗者復活戦
ウルフ・アロン（パーク24）
▽同準々決勝
反則勝ち8分（延長）　田嶋剛希（サウジアラビア）
▽同2回戦
反則勝　ハン・ジュヨプ（韓国）
▽同決勝
優勢　ボボノフ（ウズベキスタン）
▽男子90キロ級1回戦
アチルディエフ（トルクメニスタン）
2分55秒
▽同2回戦
ウルフ・アロン（パーク24）
▽男子100キロ級1回戦
大内刈り54秒　ゾロエフ（キルギス）
▽同決勝
シェロフ（キルギス）
▽女子種目別床運動予選（上位8人＝各国・地域2人まで＝が決勝進出）
12・433点⑫岸田未果子（筑波大）
12・100点
▽女子種目別平均台予選（上位8人＝各国・地域2人まで＝が決勝進出）
13・266点⑫牛奥小羽（日体大）
13・133点⑪枡井美咲（福井・鯖江高）
12・700点㉚岸田未果子（筑波大）
10・966点
▽女子種目別段違い平行棒予選（上位8人＝各国・地域2人まで＝が決勝進出）
⑤岸田未果子（筑波大）
13・533点⑧岡村真（相好クラブ）
12・933点⑤牛奥小羽（日体大）
12・833点⑪枡井美咲（福井・鯖江高）
12・100点
▽男子種目別跳馬予選（上位8人＝各国・地域2人まで＝が決勝進出）
③岡村真（相好クラブ）
13・366点④枡井美咲（福井・鯖江高）
13・266点⑫牛奥小羽（日体大）
13・266点⑫岸田未果子（筑波大）
13・533点⑧岡村真（相好クラブ）
12・933点⑤牛奥小羽（日体大）
12・833点⑪枡井美咲（福井・鯖江高）
12・100点
▽男子種目別つり輪予選（上位8人＝各国・地域2人まで＝が決勝進出）
③牛奥小羽（日体大）
13・366点⑫枡井美咲（福井・鯖江高）
12・466点
（岡村真＝相好クラブ、岸田未果子＝筑波大は2回目の演技をせず）
▽女子種目別鉄棒予選（上位8人＝各国・地域2人まで＝が決勝進出）
⑤岸田未果子（筑波大）
13・533点⑧岡村真（相好クラブ）
12・933点⑤牛奥小羽（日体大）
12・833点⑪枡井美咲（福井・鯖江高）
12・100点
▽男子団体総合予選
①日本　345・232点
②中国　343・731点
③韓国　337・965点
④インドネシア　328・431点
⑤台湾　325・731点
⑥香港　321・298点
⑦タイ　320・231点
⑧シンガポール　318・231点
▽男子個人総合予選（上位24人＝各国・地域3人まで＝が決勝進出）
①張博恒（中国）　89・299点（床運動14・500、あん馬14・600、つり輪14・933、跳馬14・600、平行棒15・466、鉄棒15・200）
②北園丈琉（徳洲会）　87・000
③橋本総業）　86・965
④張博恒（中国）　86・832
⑤ヘルミ（インドネシア）　86・799
⑥ヘルミ（インドネシア）　86・799
⑦ヘルミ（インドネシア）　86・799
⑧ヘルミ（インドネシア）　86・799
▽男子団体決勝
韓国　3―0　中国
▽女子団体決勝
中国　3―0　日本
▽男子個人決勝
①韓国　3―0　中国
②韓国　3―1　中国
③韓国　3―1　中国
▽女子個人決勝
①中国　3―0　韓国
②中国　3―1　韓国
③中国　3―1　韓国
▽男子団体決勝
韓国　3―0　日本